

佳作

人間と花

福岡県 那珂川町立岩戸小学校四年 初井 愛由

私のひいおばあちゃんは、今年なくなりました。前はかほ町の方に住んでいました。だけど、

「東京の方に住みたい。」

と言っていたので東京でくらすことになりました。久しぶりに、東京から私のおばあちゃんが住んでいるかほ町に帰ってくる予定だったので、その前日にひいおばあちゃんはなくなってしまいました。

げんいんは、にようのどくそが体中に広まり、救急車で病院にはこばれた時は、もうどくそがのうにまで行ってしまっていたので、手おくれだったそうです。

しんせきを、空こうへむかえに行きました。ひいおばあちゃんは、いこつになって帰ってきました。ひいおばあちゃんは、東京へ行く前

「おみやげは何がいい。」

と、私に聞いてきました。私は、

「おみやげはいいから、ひいおばあちゃんの写真がほしい。」

と言いました。それは、私とひいおばあちゃんの最後の約束でした。おばあちゃんは、約束を守ってくれました。しかし、私が思ってもみなかったひいおばあちゃんの写真でした。

私は泣き続けました。こらえてもこらえても、なみだが止まることはありませんでした。夜ごはんを食べる時も食よくがなく、頭の中は真っ白でした。そして、またなみだが出てきました。

おそう式では、私がおわかれの言葉を言いました。そこで、また一段と悲しくなり、なみだが止まらなくなりました。その時私は、「命って、同じものはないんだ。一つの命がなくなると、もうもとはもどれないんだ。そのかわり、また別の命にかわるんだ」と思いました。一つのたねから



いろいろな色や形の花がさきます。そして、その花がかれてしまうと、新しいたねができません。花はかれてなくなってしまうけれど、命はつながっていきます。「人の命って、花みたいだな」と思いました。

ひいおばあちゃんの死を通して、命というものを深く考えました。

「ひいおばあちゃんの命は私の中にあるよ。私がまた花をさかせるからね。さようなら、ひいおばあちゃん。」